



▲六十原A遺跡(桜ヶ丘町)出土 阿玉台Ⅳ式
山型の把手の下に渦巻文が配置され、胴部には縦方向に条線がつけられている。



▲和台遺跡(永国)出土 阿玉台Ⅰb式
口縁部に窓枠状の区画と隆帯に沿う一列の角押文がつけられている。

阿玉台式土器とは、縄文時代中期前半、今から五千年前ころ、利根川下流域の茨城県南部から千葉県北部を中心に分布した土器です。この土器は粘土に金色の雲母が多量に含まれ、土器の表面がキラキラと輝いているのが大きな特徴です。今回は、この阿玉台式土器についてご紹介します。

阿玉台式土器は、千葉県香取市にある阿玉台貝塚から発見された土器から命名されています。この土器は、縄文時代中期前半、関東地方東部を中心に見られる土器ですが、同じころ関東地方西部から中部地方では、勝坂式土器と呼ばれる土器が主に分布しています。

模様は、口縁部に窓枠状の区画と隆帯に沿う角押文が特徴です。角押文とは、篠や竹などを半分に裂いた工具で押しつけながら線を引いたもので、つながった点線のように見えます。工具の形状や押し方によって、幅が広くなったり、爪形になったりすることもあります。また、写真左にあるように、口縁部に山型の把手(装飾のこと)がつくこともあります。

また、阿玉台式土器の大きな特徴である、土器表面のキラキラしているものは、黒雲母というもので、筑波山系の花崗岩が由来です。この黒雲母が風化すると金色になります。このころの縄文時代の人々は、この金色の雲母を意図的に粘土に混ぜて土器を焼いていました。この雲

母は、河川によって流され、細かい破片となつて集積したものを採集したのではないかと想定されています。園芸用土壌である、金色粉状のバーミキュライトは、この黒雲母などが風化したものでできています。

ところで、なぜ雲母を粘土に入れたのでしょうか。土器を作る場合、粘土だけではうまく作ることができません。多くの場合は粘土に砂を混ぜて作ります。これは、粘土の粘性を調節したり、成形後に乾燥しやすくなり、乾燥による割れを防止したりするためです。砂に加え、雲母を多量に粘土に入れることで、出来上がりのキラキラとした輝きを追求したのかもしれない。

縄文時代の人々は、土器作りの技法を熟知し、さらに装飾的な美しさも求めて、土器作りをしていたといえます。この金色に輝く雲母を見出したのは、筑波山のもとで暮らす縄文時代中期の人々でした。

このきらめく縄文土器は、秋の企画展「5000年前のモダンアート——中期縄文土器の世界——」にて展示しています。縄文土器の装飾の美しさも合わせてご覧ください。

岡上高津貝塚ふるさと歴史の広場

(☎826・7111)